

はじめに

九州大学大学院助教 照屋輝一郎

私が育った沖縄県は、かつて日本の都道府県のなかでがん患者数が非常に少ない県でした。

高度経済成長期以降、急速にがん患者人口が増えていったわが国は、2007年に「がん対策基本法」が施行されて以降、健診の徹底など国をあげてがん患者を減らす試みが本格的に行われてきました。そうした本格的ながん対策が浸透する以前の2008年の厚生労働省のデータを見てみますと、沖縄県における1万人あたりのがん患者数は82・26人。全国の都道府県のなかでも群を抜いて少なく、ワーストの秋田県176・86人の半分以下でした。

このデータから、沖縄の人々には、がんにかかりにくい何らかの理由があるのではな
いか、と推測することもできます。海ブドウ、モズク等、豊富なミネラルを含む海産物を
を摂取する食生活なのでしょうか？ あるいは、物事に神経質にならない、のんびりし
た「うちなんちゅ氣質」なのでしょうか？

目次

はじめに

田屋舞一郎

……2

第1部 がんという病気を、正しく知る

がんとは何か

- 生活習慣が生み出す、過剰な活性酸素……………15
- 老化がもたらす、免疫力の低下……………19
- 体身的な正常細胞に対して、わがままで勝手極まりないがん細胞……………21
- 統合医療アプローチによる、がん治療の新たな可能性……………24

がん治療のために大切なこと

- 健康とは、病気とは……………27
- がんの性質、性格……………31
- 絶え間ない「置き換え」によって維持されている人間の体……………33

- がんになった自分をみつめ直すこと
- 病院や薬選びよりも大切なこと

…… 36
…… 38

第2部 がん治療に関する最新の研究報告

——ここまで解明された食品の抗腫瘍効果

研究報告に際して 低分子化フコイダンの出会い —— 白畑 賢隆

…… 42

□ ある「奇跡」との出会い

…… 45

・ 余命3カ月と宣告された患者さんのがんが消えた！

□ 余命宣告を受けた「がん難民」たち

…… 48

・ 「手術」「放射線治療」の効果と限界

・ 「抗がん剤治療」の効果と限界

□ 統合医療が「がん難民」を救う

…… 53

・ 統合医療が治療の選択肢を広げる

・ 科学の分野でも「統合」がキーワードに

・ 低分子化フコイダンにかける思い

がんの性質、性格

がんもまた、例外ではありません。例外ではないどころか、がんという病気は細胞、組織の情報交換や連携が乱れ、使命や任務をはきちがえて暴徒化した細胞たちによつてもたらされる病気です。会社でたとえれば、規律を無視し、使命も任務もまるでわきまえず、わがままだけを押し通そうとする問題社員が、暴徒化し、仲間を増やし、会社全体をめちゃくちゃな状態にし、やがて倒産へと追い込んでいってしまう——それが、がんという病気です。

ですから、がんは「原因となつている問題社員を見つけては片っ端から叩いていく」というやり方では、なかなか根治することは難しいのです。仮に、見つかった問題社員を叩くことができたとしても、問題社員は見えないどこかに潜んでいるかもしれないかもしれません。また、そもそも「なぜそのような問題社員が生まれてしまったのか」を理解し、その対策を講じなければ、目の前の問題社員を叩くことができたとしても、いずれまた同じこ

かさぶたから元の皮膚の状態に戻るのには、一所懸命、新しい細胞の生成が行われるからです。そして、ひとたび元の状態に戻ると、新しい細胞の生成にストップがかかります。このように私たちの体において、日々当たり前のように起きていることは、それぞれの細胞や組織が、お互いに情報交換と連携を密に行いながら、各々の使命と任務を的確に把握したうえで役割を実行しているからなのです。もし、その情報交換や連携がうまくいかなければ、生成されるべき新しい細胞が生成されずいつまでも傷が治らなかつたり、ストップされるべき細胞の生成がストップされず、その結果いぼなどの腫瘍の発生に繋がっていく事態にもなつたりします。

細胞、組織の情報交換や連携がうまくいつているか否かが、人の体の健康を大きく左右することになります。逆にいえば、病気とは、細胞、組織の情報交換や連携が乱れてしまった状態なわけですから、それを治すためには、情報交換や連携をうまくいく状態に戻してやる必要があります。